

アルファ線による がん幹細胞を標的とした治療の可能性が前進

本学先端臨床研究センターは6月16日、がん幹細胞を標的としたアルファ線による治療についての研究成果が、国際的な科学雑誌「Scientific Reports」に掲載されたことを発表しました。

本学は2016年に先端臨床研究センターの稼働を開始し、医療施設として国内初となる中型サイクロトロンを備えて、2017年にはアルファ線（ α 線）を放出するアスタチン（At-211）（注1）を製造し、新規がん治療薬の開発研究を行ってきました。研究者らは、2016年から独立行政法人日本学術振興会の研究助成事業として本研究を行い、At-211標識抗CXCR4抗体を薬剤として用いる α 線による治療が、がん幹細胞（注2）を標的とする新たな治療法として、急性骨髄性白血病に対して有用である可能性を明らかにしました。

この研究では、副作用の抑制が最重要との観点から、正常臓器の吸収線量が障害を及ぼさない許容範囲の投与量で腫瘍を破壊するのに十分な線量を与えられることを、線量評価法をもとに予測しました。

この研究成果は、急性白血病をはじめとする多くの悪性腫瘍に対する幹細胞を標的とした新たな治療法の可能性を示唆するものです。しかし、今回の研究は動物実験の段階であり、臨床に応用するためには、標的である幹細胞への結合を一層高める工夫など、さらなる研究が不可欠と考えています。

●注1 アスタチン（At-211）について
アルファ線（ α 線）は、現在臨床で実施されているベータ線（ β 線）よりもエネルギーが大きく飛程が短

いため、がん細胞をピンポイントで破壊できることから、副作用の少ない外来治療としての実用性が世界的に注目されています。アスタチンは α 線を放出する代表的な核種として開発が進められています。

●注2 がん幹細胞について
腫瘍を構成するがん細胞は多様な細胞集団であり、多様性の源泉は、がん幹細胞とされています。がん幹細胞は、抗がん剤などの治療に対する抵抗性を誘導し悪性度が增大したがん細胞を供給するため、がんの制圧には幹細胞の根絶が不可欠と考えられます。CXCR4は多くのがん幹細胞に発現し、がん細胞の増殖や転移を促進させます。なお本研究は、市販の抗CXCR4抗体を用いて実施したものです。

国際交流センター 執務室オープン

令和2年6月、国際交流センターの執務室が2号館1階にオープンし、29日には竹之下理事長ご同席の下、看板を設置しました。昨年7月、それまで学生中心であった国際交流室を組織再編した国際交流センターは、海外の学術交流協定校との学生の相互派遣、研究者交流と共同研究、国際活動の活性化の更なる推進に向け、その中核を担い、地域医療貢献・国際貢献という社会貢献をグローバルに目指すセンターです。さらに、学生の自由な参画や外国人教員・留学生との連携も強化し、教職員と学生が相互に協力しながら事業の推進を図りたいと考えています。

本学が果たすべき責務と使命は、東日本大震災と原発事故を経験した唯一の医科大学として、すでにビジョン2014でも宣言されています。この1年間、とりわけ台風被害やコロナ災禍を通じての課題も多くありますが、毎月の国際交流センター会議での情報共有や活動の方向性の確認を通じ、医学部、看護学部、保健科学部（仮称）、及び各大学院の教職員が力を合わせて難局を乗り越える覚悟です。最後に、震災以降本学が果たすべき役割に対する期待は大きく、同時に、多くの支援や応援を頂いています。感謝の心を忘れず、国際交流センタ

ーがその小さな第一歩を踏み出したことは、本学の歴史に燦然と輝くものになるでしょう。全教職員と学生のご理解とご協力、そして積極的、建設的な関与をお願いし、新たなセンターの使命を果たす所存です。

（国際交流センター長 山下俊一）



福島市内小学校から、本学附属病院の医療スタッフへ 「感謝の“木もち”」が届きました

6月17日、福島市立吉井田小学校5年生より、本学附属病院に宛てて、新型コロナウイルス感染症の対応にあたる医療従事者に対し、感謝と応援のメッセージを寄せ書きにした「感謝の“木もち”」が届きました。「手洗い、うがい、マスク着用を心がけています」「感染への恐怖と闘いながらお仕事していただきあり

がとう」「コロナに負けないようにがんばります」といった子どもたちの言葉が、一枚、一枚の花びらのカードに丁寧に書かれ、大きな木の絵になったメッセージシートです。

心のコもった暖かい言葉の応援に、当院の医療スタッフ一同、元気をいただきました。



福島県新型コロナウイルス感染拡大防止対策を受けた 6月19日以降の本学の対応・取組について

福島県における新型コロナウイルス感染拡大防止対策が第2段階を迎えることを踏まえ、本学では、6月19日から7月9日（※政府、県が「新しい生活様式」を社会経済全体に定着させるための移行期間の第2段階として示した日付）までの間、下記の対応・取組を進めていくこととします。全ての教職員、学生においては、いまだ感染症が収束していないという「withコロナ」の状況の中、再び感染が拡大する可能性も十分にあることを念頭におき、改めて、本学の使命・役割を自覚し、「新しい生活様式」の定着に努めるとともに、感染拡大防止対策の徹底をお願いします。

1、県をまたいだ移動等に当たっては、移動先の感染者の発生状況等を確認するとともに、マスクの着用や「3つの密」を避けるなど感染防止対策を徹底

し、慎重に行動すること。また、オンライン等の活用により移動の機会を減らすことにも積極的に取り組むこと。2、業務に支障のない範囲で時差出勤、在宅勤務等を活用し、職員同士が接触する機会を可能な限り低減するよう努めること。3、本学が主催するイベントや集会等は、感染者発生時の参加者への対応（参加者の名簿作成等）も含めて適切な感染防止策を講じた上で、屋内・屋外とも1000人以下、かつ屋内にあっては収容定員の半分以上の人数とすること。屋外にあっては人と人の距離を十分に確保すること。（できるだけ2m以上）4、各所属における学内での会議や委員会等は、職員同士の接触を低減する観点から、書面やメール等による開催が望ましいが、適切な感染防止策を講じた上で、上記3による開催も認める

こととする。5、学生の学内立入等については、「教育・研究に係る新型コロナウイルス感染症対策のレベル分類」により対応すること。6、健康ダイアリーにより毎日の健康観察を行うこととし、万が一、感染が疑われる場合には、所属長及び帰国者・接触者相談センターに連絡するなど適切に対応すること。7、これまでクラスターが発生している業種の施設、場所へ外出する場合は、感染防止対策を徹底した上で、「3つの密」の回避に努めること。

令和2年6月19日
福島県立医科大学
新型コロナウイルス感染症対策本部
本部長 竹之下誠一

本学もイエローグリーン・ライトアップ運動に参加



5月31日は世界保健機関（WHO）が定める「世界禁煙デー」です。それに合わせて日本では、5月31日から6月6日までを「禁煙週間」として

この期間、県内では、医療機関や事業所などを受動喫煙防止を象徴する黄緑色に染める「イエローグリーン・ライトアップ運動」を行いまし

た。本学でも、ふくしまのちと未来のメディカルセンター棟前の案内版を、イエローグリーンにライトアップしました。

自分と大切な人の命と健康を守るため、禁煙について考えてみる機会になったのではないのでしょうか。